

学長告辞（平成 24 年度入学式）

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。まずはじめに、全学の教職員と在学生を代表して、皆さんに心からの歓迎の気持を表したいと思います。別室で映像配信でご覧いただいています新入生の御家族の皆様、関係の皆様も、さぞかしお慶びのことと存じます。

学習院は、幼稚園から大学までを擁する総合学園です。その学習院全体を代表する波多野学習院長、そして卒業生全体の同窓会である桜友会の内藤会長、また全体の父母会を代表して小島副会長をはじめ、来賓の皆様のご臨席を賜るなかで、このように無事に入学式を執り行えますことを、学長として、たいへんうれしく思っております。

昨年は、あの未曾有の東日本大震災の余震のおそれと電力不足から要請された措置を配慮して、式典を中止しました。それだけに、今年は、一層うれしく思えます。しかし、大震災からの復興や放射能汚染からの回復は、簡単には進まない困難な事業です。いずれも、この先長い年月を要するでありましょう。私どもは、被災地で、たいへんな苦労をしながらも、前向きに取り組んでおられる方々と連帯することを忘れずに、これからの社会を築いていかなければなりません。ここにおられる今年度の新入生の中にも、自宅や出身高校が被災地にあって、たいへんな困難を乗り越えて入学してこられた諸君がいます。その意志の強さと努力とを、心から賞賛したいと思います。

日本はかつてから、地震をはじめ多くの自然災害に見舞われてきました。しかしその都度、それぞれの時代に、人々は互いに知恵を絞り、力を合わせて対応し、困難を乗り越えてきました。防災のための備え、もう少し一般化して言えば危機管理は、誰かに頼るだけではなく、一人ひとりが日頃から心しておくべきことでありますが、他方いま我々は、自然災害への対応に限らず、大きく変化しつつある世界のただなかに生きています。さまざまな変化と向き合っていかなければならない、また、向き合っていかなざるを得ない、そういう時代の現実があります。

一つの例を挙げましょう。通信技術の革命的な進歩は、インターネットを通じた情報のやり取りを、地球全体でシンクロナイズする、つまり同時に共有することを可能にするという、少し前まではありえなかった状況を、我々にもたらしました。装置さえあれば、一瞬のうちにどこでもつながるわけです。皆さんは、すでにそうした情報環境があって当然のようななかで、育ってきたと思います。

しかし、こうした革命的ともいえる変化も、ただ素晴らしい、とだけ言ってもいられません。確かに便利にはなりました。また、とてつもない規模のビジネスチャンスをもたらしめています。しかし、なんともあわただしくなった、というだけではなく、しっかり自らの軸を定めて対応しないと、過剰ともいえる情報の海で溺れてしまいかねません。あるいはまた、小さな画面を通じてしか社会とコミュニケーションできないような、便利な情報

機器がかえって人間同士の直接的な相互理解や連帯を不可能にするような現象をも、もたらし始めているような現実が、ないとも言えません。

つまりは、この情報革命ともいえる変化が、この世界をどこに向かって推し進めていくのか、ということは、まだ明確ではありません。情報革命は、金融の動きだけではなく、実体経済の展開までをも、地球規模で左右するような状況をもたらしています。このまま突き進んでいったときに、この地球世界がどのような仕組みとして持続しうるのか、そのなかで、我々はどのような立ち位置を定めて生きていけばよいのか、さまざまな専門家たちにも、明確には捉えられていないように思われます。

この間の世界のあり方にいちばん責任を感じなければいけないのは、我々、年齢を重ねてきた世代でありましょうが、その我々も、さらなる模索が求められています。そして若い諸君、まさに皆さんが、これからの世界の担い手にならないわけにはいかない。担い手として活躍していかなければならない。そういう自負と自覚とをもってほしい、と思います。既存の枠組みのなかで、既存の仕組みにうまく乗っかっていけば何とかなる、という時代は、幸か不幸かは別として、いまや過去のものです。安定と変化、という対立局面で考えれば、我々の生きている現在は、安定よりも変化が際立つ時代といえるでしょう。

歴史を振り返ってみますと、近代日本の出発を画した幕末維新という激動の時代に、学習院という学校の源があります。1847年に、つまり今から165年も前になりますが、当時の公家の子弟を教育する場として、京都に学習院が設置されたのが淵源です。幕末の志士たちも、その一部が出入りしていたと言われていました。

その後、明治という時代になって東京に本拠を移し、この目白の地には明治41年、西暦1908年に移転しました。昭和前期までの学習院は、宮内省が管轄する旧制高等学校を中心とした小・中・高をもった学校でした。そして、敗戦にともなう激動は、近代以降の日本にとって第二の開国とも言われる、変化の時代となりました。そのなかで占領軍のGHQは、宮内省所管であった学習院の廃止を考えました。そのとき、戦前の学習院が文武両道、時代の制約のなかでもリベラルな性格をもった教育をバランスよく実践していたことを誇りとしていた何人もの先生方がGHQに働きかけ、結果として学習院は、新たな学校制度の中で私立の学校法人として再出発することになったのです。もと国立ないし官立の学校が完全に民営化されるという、日本でも他にはない歴史を、学習院は刻んだこととなります。そのなかで、学習院大学が発足したわけです。今から63年ほど前のことでもあります。しかし戦争末期には、この目白の地にも東京大空襲の被害があり、木々が焼け爛れただけでなく、幾つかの木造校舎は焼け落ちていました。食べるものさえ不足した、戦争直後のものない時代に、新制の私立大学を中心に学校を軌道に乗せることには、たいへんな苦労があったことを、我々は、残されている記録から窺い知ることができます。

この入学式の最後には、学習院歌を斉唱してもらいます。斉唱といっても、男女の学習院高等科から進学してこられた方々以外は、今日聴くのが初めてかもしれません。皆さん

の手元にある式次第に、歌詞が記されています。若い皆さんには、なんだか古めかしい歌詞だと見えるでしょうか。この院歌の作詞は、戦後長らく院長と学長を兼任して、私立としての学習院を中心となって築きあげられた安倍能成先生の手になるものです。安倍先生は、旧制第一高等学校の校長を務めた哲学者ですが、戦後一時、文部大臣にもなった方でした。「正直であれ」ということを、絶えず学生に語り続けた、学生思いの教育者でありました。この歌詞は、是非校歌がほしい、という学生たちの要望に自ら応えたものです。そこにある「燃える火の中から不死鳥のように蘇る学習院」という表現、あるいは「荒波」とか「黒雲」といった言葉は、文字通り戦中・戦後の激動を生き抜いた人たちの想いを表しているものにほかなりません。あまりにも豊かに物が満ち溢れるなかで育ってきたに違いない皆さんも、是非とも想像力を働かせて、理解してほしいと思います。皆さんが過ごされるこのキャンパスには、いわば歴史が深く埋め込まれているのです。

幕末維新や敗戦直後と同じように、いま我々もまた、あらゆるものごとが大きく変動している時代をとともに生きています。そう簡単に将来の見通しが立つような時代ではありません。しかし他方では、旧来のしがらみにとらわれない、自由な発想から行動できる可能性が、大いにありうる時代だとも言えます。こうした状況の中で、この春に大学生として第一歩を踏み出した皆さんは、4年間という貴重な時間をしっかり使ってください。大学では、外の世界の荒波から比較的守られた時間と空間を、皆さんは手にできます。それに甘えることなく、いずれ4年後には荒波の中に漕ぎ出していかなければならない。それをにらんで、それぞれ自分の人生をどのように組み立てていくのか、学生である間にしっかり追求してほしい、と思います。

先週初めに、真新しい学生証を受け取ってから、いろいろなガイダンスやTOEICの一斉試験、健康診断といった公的な行事、さらには部活動やサークル活動をしている在学生たちによる強烈的な勧誘の働きかけなど、おそらく、皆さんにとっては、あまりにめまぐるしく時間が過ぎたのではないかと想像しています。焦る必要はありません。じっくり構えて、学生生活を開始してください。

明日からは全学で授業が開始されます。はじめのうちは、導入的な時間が多いはずですが。しかし、最初が肝心です。高校までと違って大学では、一人ひとりの学生の皆さん自身の自発的な学ぶ姿勢が求められます。じっと待っていれば、全てがお膳立てされて運んでもらえる、というものではありません。どうぞ、積極的に自分たち自身で貪欲にいろいろなことを吸収しようとし、また、さまざまなことに挑戦してください。そのためのチャンスは、学生生活のなかに豊富に存在しています。教室での勉強には、予習・復習含めて、しっかり取り組んでもらわなければ困りますが、学ぶということは、教室だけで事足りるわけではありません。部活動、クラブ活動に取り組むことから、皆さんは貴重な学びの機会を手にするでしょう。留学を希望するなら、一年生のときから計画的に行動したほうが良い。準備段階として、短期の海外語学研修にまずチャレンジしてみるのも一案で

しょう。厳しいなかでも楽しめるようなプランは、さまざまに工夫できるはずです。どうぞ積極的に挑戦してください。そしてまず、身近なところから仲間同士での会話を大切に
して、良い友達をたくさんつくるように願っています。人間は社会的な存在ですから、一人では生きていけません。いろいろな人たちとつながり、さまざまな人たちの活動のおかげで、人生を切り拓いて行けるということを、頭のどこかにしっかりと置いておいてください。

最後に、大学生としての生活をスタートさせる学部の学生諸君は4年間、大学院あるいは法科大学院で、より専門的な学問の世界に取り込まれる大学院生諸君は、それぞれの年数を頭において、それぞれが自らしっかりとプランを立てて歩み始めるように、ということ
を再度申し上げて、私の入学式告辞と致します。

平成24年4月8日

学長 福井 憲彦